

〈資料〉

折口信夫「後期王朝文学史」(上)

(昭和四年・北佐久教育会)

伊藤 高雄 編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が大正末年から行なった講義・講演を、学生で門弟であり、昭和六年から八年まで助手を務めた小池元男氏が筆記したノートの一部である。

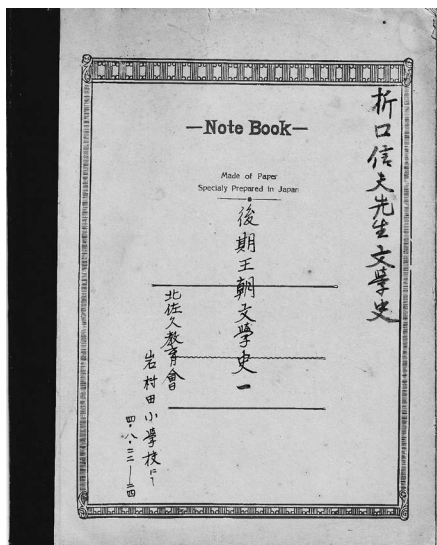
・資料の解題は、先に國學院大學栃木短期大学國文学会の『野州國文学』第八十六号（平成二十五年三月）の「小池元男ノート——折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート——」、及び『國學院雑誌』第百十四巻第十号（平成二十五年十月号）の「折口信夫・國學院大學講義その他——小池元男・石上順ノート——」を参照いただきたい。

・本号に翻刻する資料は、そのノート番号28・29「後

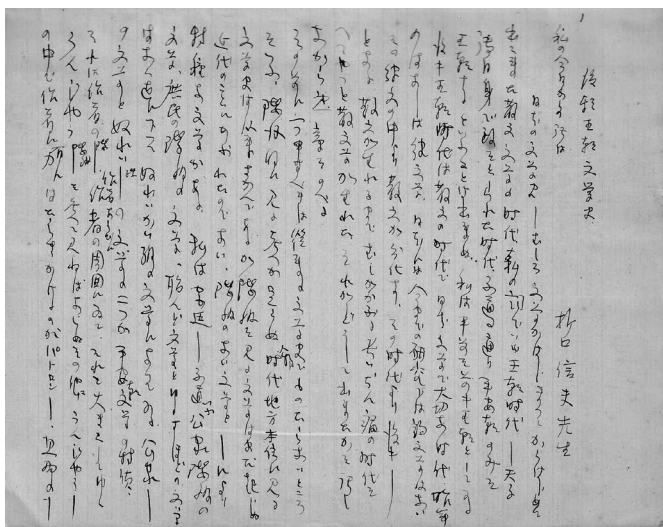
期王朝文学史」の一部である。本資料は、長野県北佐久教育会の招きで昭和四年八月二十二日（金）から二十四日（日）まで岩村田小学校で行われた講演の記録で、その目次は「後期王朝文学史目安」として雑誌『民俗学』第一巻第二号に発表されている（新版全集15収録）が、その内容が公になるのは初めてである。本報告では、その目次を加えて報告する。

・翻刻は、伊藤が行った後、武蔵野大学兼任講師の渡部修氏、國學院大學大学院生（当時）の郷田典子氏と読合せをし、最終的に伊藤が整理した。

・表記は原則として常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いたところもある。判読できない箇所は□で示した。



表紙



一頁目

折口信夫「後期王朝文学史」(上)

北佐久教育会・岩村田小学校・昭和四年八月二十二日(二十四日)

第一部 散文

第一章 宫廷文学の発生と展開と

一、女房生活の成立

私の今日からの話は、日本の文学史——むしろ文学がはじまつてからはじめて出て来た散文文学の時代、私の詞でいふ王朝時代——天子御自身で政をとられた時代、普通の通り平安朝のみを王朝するといふことは出来ぬ。私は平安前期を前半王朝としてゐる。後期王朝時代は散文の時代で、日本文学で大切な時代。昨年の話は律文学。日本には今までの研究では韻文学はない。その律文の中より散文が分化す。その時代より後期王朝となる。散文が生れるまでむしろかぶる長い陣痛の時代を経てやつと散文文学が生れた。それがどうして出来たかを話しながら第一章を述べる。

その前に一つ申すべきは従来の文学史で物足らないと

ころをいふ。階級的に見る考へが足らぬ。人物、時代、地方本位に見る文学史は従来盛んであるが、階級を見る文学はまだ起らぬ。近代のことにかぶれたのでない、階級のない文学と、階級により特殊な文学がある。私は宫廷——普通いふ公家階級の文学、庶民の階級の文学、殆んど文学と許すほどの文学はなく、直に下つて奴隸階級の文学になつてゐる。公家階級の文学と奴隸階級の文学の文学の二つが平安朝文学の特質。それは作者の階級、作者ならびに作者の周囲にゐて、それを大きくしてゆく醗酵階級を考へて見ねばならぬ。その他に醗酵階級の中で作者に有力に働きかけるのがパトロンの階級。旦那の階級である。仏教の方で、宗教を保護するパトロンのことを旦那といふ。少なくともこの三つの階級を見なければ、この三階級より成り立つてゐる一方面を見ねば、今後の文学史はだめ。作者階級、

そのひろがり、もつと働きかける擁護者の階級。

私等はすべて日本の文学は宮廷の文学だと考へてゐる。やつと鎌倉時代ごろより宮廷を離れた文学が起つたやうに書いてある。宮廷の文学より見てゆくと、三階級の動きの交錯するところがよくわかる。

宮廷の文学は作者の階級も擁護する階級もよくわかる。故にこゝで宮廷文学をいふのが本当。

宮廷文学とは皇居のみでなく、宮廷と同じ生活をしてゐる貴族社会まで含む。

平安前期は宮廷の小さなものが沢山あつたのを政治家が小さな組織を壊して、大きな組織にしてこれが日本の大問題であつて、大化改新などはこれ。貴族は小規模乍ら天子と同じ生活をしてゐた小宮廷といふ生活を持つ。国々の主が後の貴族。それを天子が認めて、その関係がはじめは同格ではないが、相手を認めてゐたのが次第に君臣の関係が緻密になつたからして、世の中が進んで来た。それが完全に君子と臣下の考へを起したのは平安に入つてから。

昔より引き続きとして貴族の家庭生活は宮廷と同じ。貴族の高い位置の女官を女房、低い位置のを女官と

いふ。

貴族の家の女官を女官・女房といふのはおかしいが、宮廷と同じ生活をしてゐる故に不都合ではない。それほど宮廷の生活の小さい生活をしてゐた。

故にこゝでいふ話は宮廷をはじめ、貴族の文学を引くためにいふと見てもらいたい。

この時間の話は昨年と話と引き続いてゐる。

女房は平安初期より著しくなる。それ前は詞なし。女房は後宮、皇后はじめ、下々の女の居るところを後宮といふ。支那ではこれに対して男房があるが、日本にはその例なし。一人／＼の女の□□をもち主を女房とする解はいけない。後宮の天子のお手が、りを除いて他の女は女房といふ。これはもと／＼後の女官と称するもの、中より出てゐる。女官中の高いものは女房といふ。

女官といふものは古代より全体宮中の神事に仕へてゐた。宮中の女は神事のほかなかつた。天子を生き神といふのは、比喩のこと、我等は考へるが、昔の人は天子はある時期は神だつた。不言不語の中に人間がある時期に神になることを知つてゐた。霊体の神はなか

つた。神の動作をし、言葉述べるのは物忌みの後、人間がする。天子は宮廷にてその仕事をする人。宮廷に仕へてゐる女は神に仕へる女で同時に神とならない時の天子にも仕へる。その辺は曖昧。

今の内侍所の女等も神と天子との間か不正確。今だに宮中に神さん本位に仕へてゐる女に伝つてゐる。古くより長く続いて変化せんとしてゐる時代で、世の中の変異と共に神に仕へる部分と神でない生活に入つてゐる部分と二つになり、神に仕へる部分はごく低くなり、人間としての天子に仕へる方が職掌が高くなる。平安初期より女房、女官と分れる。低い方が女官である。この中には樋洗^{ひぎ}等いふものもあるが、天子の神秘な部分にふれてゐる故に女官。高い女はもつと天子の大切の方にふれて行く。人間としての天子に仕へる女官が二つに分れる。

小野の小町は——伝説には出羽の郡司の小野の良実の娘となつてゐる。姉を大町といふなどあるが、どこまで信ぜられるか。この郡司の女が采女として、宮廷に召される。君子は神事と政事と一緒にした。国造と古くいふ。それより宗教上の権を取つたものを郡司とい

ふ。この女を召して采女として仕へしめた。君子の宗教儀式にかぶれたものを地方官に与へて宗教を統一する。平安初期、出羽の郡司の女が来て、平安の女房生活のはじめを記念する人になつた。女房は小町より先輩あれど小町が代表者。さういふ女が宮中にゐて天子との尊い生活に関与してゐるものが、女房として羽振りがよい。それが皇子女、王族の家、貴族の家でも女官より女房階級が出て来る。これ平安初期の事実。女房のした仕事は。この仕事が日本文学で重大な仕事になる。実は日本で散文のおこつたのは本当は平安朝でない。今日我等に散文と見えても当時散文の様なものでも律文として読みあげねばならぬものが、平安前期になつた。これが奈良時代より更に前よりある祝詞、宣命といふもの。今ある祝詞は一切、平安朝の手を経ないものはない。祝詞は日本文学中一番古いといふことを私は信ぜず。古くとも平安の呼吸が、つてゐるもの、及び新作のものがある。故に今でも読めばわかる。十分の六七、わからんところは改作者が悪いところ、文章を知らなかつたところ。

祝詞はまた神主が読むと律文的の感じを起こす。宣命、

今ではこのことばを用ゐぬが信州の南ではまだ祝詞の意に用ゐる。土地の魂、神に云ふことばをいふらしい。田畑の荒れる神を鎮める等。宣命の本当の生命のあつたのは奈良朝。この宣命は続日本紀宣命。奈良に出来たものでないが、奈良のことを知るのには続日本紀を読んで、頭に畳み込んでおかねばならぬ。これを読めば万葉、風土記その他を読んでも生きかへつて来る。桓武の時代になつても、奈良の気分の濃い時代を扱つてゐる。この中に生きた宣命が入つてゐる。この読まれる時は、律文的、それは証拠がある。技術がある。この事も私の考へが變つてゐる。奈良の宣命も擬古文、奈良の本当の感情が入つてゐない。万葉の歌も(万葉調の)今作つても昭和・大正の気持ちが出ないのではないが、擬古文である。宣命は今信じてゐる人が学者中にもある。しかしこれは誤りで、半分はこの時代の語だが半分は死語で莊重感を出す為、為に文法中の誤解がある。

さういふ風なものであるが、祝詞、宣命は奈良よりあつた散文と考へてよいもの。内的に云へば我等の考へるほど散文ではない。謡曲のやうなもので、散文のや

うなものもうたひ出すと律文になる。この過渡期を経て、立派な散文が出る。

かゝる宣命、祝詞が奈良より前よりあつた。それは天子のいふ詞を記録した。又は貴族の主のいふことを記録して下の人に読んで聞かせる。もとは口伝であつたものが。記録したものと前は定つてゐる文句で、口づから授けなくても下の人が繰り返して下に伝へた。次第に臨時に新作して読んで聞かせた。しかし条件として上の人がいふてゐるのを筆記したといふ事が大切。その天子のことを記録するものに男女二通あつた。今でいふと女の生活が低くなり、ことに昭和の天子になつて女はことに押し込められて了つた。

何千年の女子の生活が潰れて了つた。

天子のすぐ側にてことばを書くもの、と公式に書きとるものとあり。非公式ながら天子の言そのまゝ、書くのが女。太政官の書記官が筆記するのは、文章を飾つて外へ出す。形の上は男の方が莊重、神秘で力強いのは女の方より出るもの。

口づから伝へるのは本当であらうが、歴史でわかる頃よりは皆筆記してゐる。宣命は公式のもので男の書記

官階級が古文法に似せて書いたもの。もつと単的な効力の多いものを天子の側で書くのが女。

男の方は大体漢文の意味で書いて、助辞・助動詞・動詞・形容詞の語尾等を小さく書く所謂宣命書き。女の方は全部万葉仮名。これ等が正倉院文書等に残る。口語をそのまゝ筆記する形で書いたもの。口の上の文をそのまゝ書いた形故にわからない。気分が後より見ればぬきになる故である。かうしたところが、奈良の散文書きのわからんところと思ふ。私は片仮名は女より発達したと思ふ。

男は漢字で意味をとり、どうしても音で示さねばならぬところを宣命書きとす。

女の仕事が認められて来て万葉仮名が用ゐられた。奈良時代すでにしかり。平安になると女の仕事が男に模倣さる。平安の文学は女房文学とされてゐるが、女房の仮面を被つて男がやつてゐるところが沢山あると思ふ。

土佐のはじめに、

男もすなる日記(促音が出ない故に京の人は訛る)

といふものを女もして見んとて

日記は女のつけるものではないが、つけるんだといふ風にして貫之が女の兒で書いたといふのは誤り。男の日記でなく男が女の文字で書かうといふのである。男の漢文で書いた日記には歌を入れるのは不都合だと感じて来て本文もやはらくせねばならなかつた故に男日記を書くべきを女文字にて書いて見やうといふ事である。これを逆にあのやうないひ方をした。文は単純に表面からのみ取れない。

貫之といふ人は名高い人だが、仕事で歌には感心せん。仕事したところのみが偉い人で、歌はだめ。それは文学論が立つてゐない故であらう。

貫之の偉いのは仮名の文を書いたこと。仮名文の方が大きい。女の文を貫之頃より男の方へ移して来た。貫之は平安百年頃より活躍してゐた。古くからあつたのか貫之頃より女文字をばうつして来る。女の文章が男の方へ流入して一見女のごとく見えるもの、この後も多く、平安初期、奈良朝末期にも女の文を男が真似、女とはいへない事実に於て沢山ある。万の文は女の文章より出てゐる。女の用字をそのまゝ使つたのである。この女等が天子の仰ることを筆記する。そして手輕に

下に下す。これを女房宣といふ。少し重くなると内侍宣といふ。皆仮名で書いてある。

かういふ女等が天子の仰ることを書き留めたといふばかりでなく、この他に天子の毎日の言行を記録しておいた。これは非常に大切なこと。天子のすることは皆神事だといふ信仰による。これが後々の規範になる。我等の歴史でわかることのみでは古代のことはわからぬ。江戸時代まで行はれたものに御湯殿の上の日記あり。ちらばつて了つて今、群書類従に一部のみ出てゐる。女の文才が極端に低くなつた頃のもの、皆集ると面白と思ふ。

天子の御殿生活は一番大切なので、大嘗祭を見ても天子は何度も湯に入られる。わけなしに入つてゐるがもとほ、湯殿で行はれる神秘が大切。湯殿で物忌みの禁欲生活の着物を脱がれると開放されて神となる。着物を取り去る女が出て来る事が一番大切。この女が後には后となる。日本の皇后には王族出と臣下とあり、臣下出は后、王族出は中皇命といふ。

后は風呂の中で着物を脱がせる役で、するとすぐに神

婚が行はれることは大切である。後世まで御湯殿腹といひちがつた資格をもつてゐた。お湯殿の上に日記があつてそれを記録してゐる。今残つてゐるのはこれはないか。日記のおこつたのはそれがもと。

天子が神になるのはどうしても一度湯殿に入つて着物を脱がねばならなかつた。

平安朝になると、御匣殿といふものが出て来る。御湯殿は本義が忘れられて、貴族の女が天子に近づくと、皇后、女御、更衣でなくして天子に近づくのは御匣殿といふ役になる。天子のみぐしをくしける役である。御櫛笥殿。

御湯殿より御匣殿へ移つたのは平安時代。御湯殿は大切であつた故に後まで日記があつた。そこ、内侍階級の者書いた。

貴族が結婚する場合に唐紙を隔てて聞いてゐる。おとぎ、の役がある。御湯殿の上で聞いてゐる。この他に天子の言行に関する日記がだん／＼あつて記録してゐる。貴族にてもそれが次第に混乱を起こして来る。

巻物であつたので、自分の仕へてゐる人の言行のみでなく、私生活まで書き入れるやうになる。どうしても

私生活を書く。そこで公私混同した日記になつて来る。ところが宮中、貴族の家の女は一つの教育家である。日本の教育は決して教へるものでなく、聞かせるもの、詞を聞かせると、精霊があつて——ことだま——作用をあらはして語を聞いてゐる人の魂にくつゝいて了ふ。いゝ文章を唱へかけられると、いゝ魂が入つて了ふ。英雄の文章を聞かせると聞かせられてゐる人が英雄の魂を得る。これが、語部の一つの職掌である。語部の物語の魂が貴族、天子に入つて了ふ。この語部には男女種々あれど宮廷に生活するものは後の女房になつて行く人等である。——神秘的資格をもつてゐるものが語部になる故に若い者もある。

この風が語部がなくなつても、平安になると形式的に大嘗祭の時にのみ地方より出る。語部がなくなつて女房等が語部の仕事をする。だから平安朝の物語と女房との関係は密接。

万葉集を見て奈良朝——万葉集は奈良より平安にまたがつて出来た。材料は奈良——万葉では物語よりも歌の方が神聖であるといふ考へが出てゐる。物語そのものよりもエッセンスたる歌の方が大切に歌のみを唱へ

れば物語を全部唱へると同じと考へてゐる。

それは奈良のこと。それには大きな社会上的事実がある。国々の君子が天子に服従を誓ふ場合はもとは国々に伝はる寿詞といふものを天子に申し上げる。後には約して歌のみを歌ふ。寿詞をいふと寿詞に入つてゐる魂が天子につく。後には歌だけ歌ふと国々を治める力が天子に入る。この信仰が進んで国ぶりの歌を唱へられた人はその国を治める力が生ずると考へて、盛んに国風の歌を奉り、歌つて聞かせ申す。この歌を記録することが盛んになつて来る。これが後の歌物語の起りである。国々の歌を記録する。

女房の日記中に物語をせなくなつて国々の国風を記録してゐる。天子の言行を記録する一方に国々の歌を記録し、又私に自分の歌を書くといふ事になる。日記の中に女房自身の歌を国風の歌のは国に限らず家からも奉る——後述——。

女房の天子の言行と共に自分の事を書くと同じく、国風の歌を書くと共に、自分の歌を書く。一巻でありながらこつたに書き込んである故にこれを整理する時が出て来、この中により歌なら歌、天子の詞、ある女房

の日記等を抄したり、又その中には自分等の聞いた話をも書き入れて来るやうになる。簡単な一種の恋物語を書き入れる。するとノートが内容がいよいよ多くなる。これをひつくるめてこの巻物が女房の日記である。巻物では工合が悪い。一々巻かへしてよまねばならぬ。それをば救ふ方法が発明せられ、経巻より出て折本の経本が出た。それを双紙といふ。これが本義を忘れて、草紙、冊子、草子等いふ。これを更に背を綴じる。すると袋が出来る。袋冊子といふ。日本の文学史の一つ、変態は書物の体裁が変はると共に、内容のものはいふに及ばぬといふ風に考へてゐる。本の体裁と文学の種類とを見るのも一つの文学史の見方。日記中の特殊な日記は巻物をやめて袋草紙の形をとることになる。

十時まで

二、日記の内容

女房日記より平安の各種の文学が出、女房が日記をつける。天子の言行を記録す。天子貴族の間の言葉を書き取つた長い間の練習が仮名文を生む。自由に自分の考へを書けるに至つたのは一朝一夕ではなかつた。

女房日記の内容を簡単に分けて話す。まづ第一に主人の言行。これは時代が下るにつれて平安朝女房文学が盛んになるにつれて、この方の記録は目につかなくなる。事実は書いてゐたが抄き書きはこの部分はしなかつた。享樂的になり面白い部分のみを取り出した故。一体、日記は女房がつけてゐる日記はあとからあとから借りられて書き写された。

物語の中に同じやうな女房のことが日記に出て不思議とされてゐる。今日ならば女は心が狭いから同等の人のことを自分の物語に書くことはないと予断されてゐる。紫式部の日記には他の女房ことに清少納言のことを悪く書いてゐる。いかにも予断にびつたりする。しかしこの他の一面に於ては当時の人等は歌だけは少なくともあらゆる態度の歌を認めねばならなかつた。敵方のも自分の氣にくはないのもすべても取り入れぬは歌人としての立場がない故に歌のみは単なる憎きを越えてあらゆる歌を含まうとした。同輩の女房の歌が日記や物語に出て来るのみの不思議はない。後世より見て、同時の女房の作が入つてゐる故に、後世の書き入れとするが、これは誤り。日記は借り出され、写され

して、それが転々してもつと自由に見られてゐた故に女房は日記の文を練つた。日記中から大体一部分を抜く。主にその女房の私生活、それが女房の日記といふもの。又はその女房が作つた歌、又はその日記に書き留めた昔の恋物語を抄した、一種の抄物を作つた——鎌倉より変意——ある分類によつて抄して来る。今日残つてゐる女房の歌集はすべてこれ。大抵自分の日記に書いたあるものを他人が抄した故に、はしがきは作者自身の書いたものか、抄した人がつけたのか不明。恋物語。古あつた恋愛に關した部分を抄き出す。伊勢物語の如き。宇多天皇に愛せられた伊勢といふ女の(貫之等より歌が出来)著故、伊勢物語の古いのははじめに伊勢の斎宮の記事があつた(後世在原家の人は神宮に詣れぬ)それで伊勢の斎宮に關する物語だから伊勢といふ。私は昔の物語を国で類別した形式があるのでそれで伊勢物語といふのだと思ふ。それで伊勢は時代により説が違ふ。作者も業平が作つたと昔より云はれてゐる。今ならば変だが昔はあんな事があつた。晋唐小説の真似をしたのである。楚辭等の形式を真似して一人称で神仙の女に会ふた等いふうぬぼれの文がある

故に業平自身が書いたかも知れぬ。業平の日記に附会して大きくなつたものともいふ。

私の今の考へでは、伊勢を在吾(語少の日記)中將の日記といふから在五は在原家の第五の男子の近衛中將だから業平の日記といふ事になつてゐるが、これはある人の日記の中から業平についての恋物語だけを抄して來た。その抄に面白い故に書き加へた。在五に關する日記の中の恋物語といふ意。必ずしも在五の書いた意ではない。

或は宮廷貴族の中の家庭の中の年中行事を記録したものの。その外にも一つ違つたものは日記が人に見られる事を目的としてゐたものがあつた。これをひきくるめて枕草子といふた。必ずしも清少納言に限つた事ではない。清少納言が有名故に残つた。あれは枕事の草子といふ事。

清少納言は中宮(平安初期は皇后を立てずに中宮を立てた。後には藤原氏の勢力争ひの為に皇后をお立てにならなかつた)定子に仕へてゐた。定子より枕にせよとて檀紙を賜はつた。普通、枕元に書き入れるものといふ。私は平安には枕ごと、いふことあり。固定して

枕詞となる。文章の生命を約することばがまくらごとといふ。ふごとのちり……のやまぶみ等いふ書があり、これを入れねば歌にならないと考へてゐる文句あり。それを枕ごと、いふ。その中平安朝に固定したものの枕詞。枕ごとの時代は意味が広がった。枕を集めた草子が枕草子——これは手習用である。平安朝になると、

男は漢文、女はしない。天子で嵯峨・村上帝のごとき天皇は皇女のために漢文をお授けになる。その他の天子にもかゝることがある。例へば、村上帝の皇女には源順の和名類聚抄——分類した辞書で、漢文体——これを手習ひさせた。往来物等も字引でこれを手習ひしてゐる。不思議に昔の真似をしてゐる。寺子屋の教育は往来物節用集等を用ゐたのである。今でも大抵、名詞だけを習ふ。一条帝になると藤原の為意の書いた口遊といふものがある。皇女の為に書いた手習ひの書。この意味で清少納言の枕草子、その他の枕草子が出来た。枕草子では定子の記事等は中心でなく、自分の私生活も中心ではない。山は、春は、文は等とある部分、清少納言が心を引いたことを連想的に書いたのではなくして、手習ひしつゝ、知つてゐなければならぬこ

とを習はせた。語部の仕事を女房がやつて聞かせたのを讀ませ、更に日記を讀ませた。それが言霊の信仰が薄れて書き乍ら覚えさせた。手習ひの初めは歌より出てゐる。

なにはづに

あさかやま

等は手習ひ歌の元祖とされてゐる。必ずしも初めてではないが、名高い国風歌で、女房の日記にあつたものを抄した。平安の歌人の家集に手習ひ歌があり、筆の先より魂を取り入れた。それが教育的の方便と考へた。

枕草子はその一つ。嚴重に分類出来ずにいろんなものが沢山ある。女房の作つた歌、昔物語、等の中を見ると女房自身の歌でない歌が入つてゐたり、昔物語に女房の歌の入つたりしてゐるのは日記より抄物を作つた故、さういふものが又一つの違つた日記になつて来る。藤原高光——親の代まで勢力あり、自分の代に勢力を失ふ。この人の日記が伝はる。——多武峰少将物語。又高光の日記といふ。枕草子が清少納言の日記と云はれ、伊勢が在五中将日記と云はれると同じこと。日記中に物語が入つてゐる。日記中より物語を抄すると物

語。高光に關することのみ抄すると日記。高光側近者の日記の書いてゐたものの抄であらうか。さういふ風な事実の日記もあり。

三、物語の分類

日記は、平安朝の女房文学の母体で、同時に平安朝の女房文学はその中より取り出されて來た。一体物語といふことは日本のことばの意味はごく近代まで意味が流動してゐ、ことに平安では著しい。第一、物語は語らねばならぬといふ意識もあり、記録せられたものにも、物語の名が与へられてゐる。物語を大ざつぱに分けると六つの区別がある。日本人は昔、歴史といふことと小説といふ事は区別がなく、小説といふ事は知らなかつた。近代まで物語は事実だと思つた。似た物語の異つた部分より物語は疑はれる。しかし長い間物語は事実だ、歴史だと考へられ、實際には歴史は信仰的に考へられたことで、空想の加はつたもの、空想ばかりのものもあり、歴史と又作り物語——小説とか対立する。しかし、作り物語も古くよりの習慣である点までは眞実だといふ信仰があつて、全々の偽物だとは読

者は思はなかつた。歴史と小説と逸話集——小説よりもつと短いもの。

物語は大体この三種の別がある。日記の内容とは違ひ、物語の方は極限する。日記の段階を経て物語は段階的になる。第二次の物語はこの二種の別あり。歴史は長篇、小説は中篇、逸話は短篇の寄り集まりである。

こゝでは作り物語は第二章に譲つて簡単にしてともかくこの三条を説明する。

我等の国では歴史に關する物語は割に遅い。本当の事実だと我等に思はれるものは平安末、この頃より歴史的批判が出来て空想は排除して歴史は正確になる。古くは本当の歴史と許せるものはないが、平安前を見ると、記紀の種になつてゐるものにはさういふものが沢山あつた。さういふ歴史と信ぜられるものが、たゞ事實の検査が行き届かぬ故に伝説神話とされるものが多い。

平安末に歴史が始まると時代が變つて來る。今までの生活が變化す。社会の中心生活が變化し同時に作者階級も變化す。平安末になると公家階級より、武家階級、文学者も女より隱者の文学に移る。武家階級、隱者の

階級は、従来のものに対して、批判的であつて、時代が変化する暗示が平安朝末の百七十年間に次第に盛んになつて、時代が変はる。いよいよ武家階級の時代になり、文学者も隠者が中心になる時代になると、歴史が正確になる。

その平安朝の末の歴史の現存してゐるものを云へば大鏡、栄花物語等いふものが、平安末の歴史の代表的のもの。嚴重に云へば大鏡は鎌倉のものかも知れぬ。文法より見ると鎌倉。伝説では平安朝の末で、栄花物語と後先がわからん。二者共によつぎ(世継)といふてゐる。伝説的には種々あれど作者不明。私は文章より云つて大鏡は鎌倉になつてからと思ふ。

世継とは枕草子と同じく広い。奈良、平安では系図といふこと、系図をもと、して書いたものが世継。

日本の物語は不思議なもので、大鏡では世継といふことが意味が重なつてゐる。三人の老人の話を嵯峨の雲林院で青侍が筆記する事になつてゐる。

おほやけの世継

世継が語つた故に世継といふ。しかしかゝる体の歴史を世継といふのである。

一体日本の歴史の書き方には形がある。人に信じさせるやうにするのには、神の告げだといふ立場を据えねばならぬ。これは大昔からのこと。みな神の託宣である。古いところは巫女の夢物語。何十年信じたことの方が一回あつたことより根底が深い。

この時代は時代的に不安な時代である。武家が公家に代る予感ほ平安中期末頃よりあつた。清少納言、紫式部の頃よりそんな予感がある。

八幡太郎は恐ろしや

沢山皇族の流れより出て、武士となつたもの、中で、八幡一派は恐ろしいといふこと。こんな歌がある。そればかりでなく、病的な社会では神仏の信仰が盛んである。それは熊野の信仰が盛んになつたためであちこちで神の告げ、仏の託宣が行はれた故に昔よりさうであつたところへ新時代の憂鬱な色合いを含んで、それがひどくなつて神仏の託宣でなくては信じられなかつた。故に四鏡皆、神秘的な神のお告げのやうな気持ちで書いてゐる。しかも今までのものに比して割合に事實は正確になつた。歴史上の事実の批評が冷静になつた。明治時代まで歴史は冷静な批評と高き觀察が重んぜら

れた。

四、逸話集

逸話集は、歌物語と関係が深い。その一部分は後述。平安末より盛んになり、鎌倉になると非常に盛んになる。僧隱者の抄物類にその様子がよくわかる。西行が書いたといふ撰集抄(後人の書き継ぎ)。平安の康頼の宝物集。時代が下がるが無住法師の沙石集等いふ種類のもの。これらは仏典の上の断片的の話やこの世に實際あつたと信ぜられてゐる物語を集めて宗教教育の材とした。室町に入つて、十訓抄。かゝる類は江戸の仮名草子まで連絡がついてゐる。宗教的な逸話集は後期王朝に於ては、そこにまた違つた様子が見える。一体、逸話集は早くより宗教的色彩が出て了つた。仏教に早くより利用せられた。

都が平安に遷つた許りの平城帝の時に奈良の僧景戒の書いた日本靈異記。立どころに仏の応報の現はれた不思議な話。断片的な話を集む。来世でなく現世に応報の来たことをあげてゐる。不思議な事にこの靈異記には所々歌が入つてゐる。これはその前に他のものがある

つた——事で古よりあつた歌物語を仏教の方へ取込んで例話集としたんだといふ事である。この書物は古典全集のものがよい。この靈異記系統のものが平安に明らかに二つあり、藤原為憲の作つた三宝絵詞縁起等で、これが仏教に関する例話集。靈異記より二百年後のもの。更に平安朝の末になると、今昔物語といふのが出る。源隆国の書いたものだといふ。これは割に信用が出来る。何か、隆国に関係のあることは事実。三国について仏教的事を書いてゐる。天竺、震旦、日本の三国の仏教的話で、仏教の応報と関係のない性慾的な三面記事的のものが多く、これは日本の古書には皆あることで昔の宗教家は大して悪いとは思はなかつた。四分律などを見ても邪淫をとめてゐるのか、教へてゐるのか、わからんものである。僧は平氣であつた。信者はこれを聞いて笑つてゐる。日本は性慾の上のことは平氣であつて、神人ともに喜んだ。それが入つてゐる。仏教の意味を離れてもこれが入つてゐる。十訓抄は社会道德を教へる本であるが、平氣で書いてゐる。靈異記以来邪淫を書いて、読者を喜ばした。今昔はごく卑しい事を書いてゐる。しかし大体に於て仏

教のものであることはいなめない。

この三つを通すと仏教的のもので、推移の跡が知れる。絵詞は今絵がないが、絵はあつた。靈異記も今昔も絵があつたに違ひない。奈良の因果経絵巻には上部に絵が入つてゐる——今ではこれまで絵巻の歴史は登れぬ——それが次第に区別を立て、文と絵とを交互に書くことになつた。これが絵巻の本体となる。

絵詞は絵を主として物語るもの。物語絵とは違ふ。絵詞は宗教的のもので絵解きである。

私は靈異記の性質上、もと絵があつたものが亡びて了つたものであると思ふてゐる。今昔には絵詞は残つてゐないが、宇治拾遺——今昔の変体のもの——源の隆国が宇治で国々の話をさせてそれを隆国が筆記したといふ。これは平安末の書物の形で、他の書より引用してゐることが多い。宇治拾遺は今昔物語に落ちたものを、拾つた事ではない。拾遺は大納言の唐名である。

宇治拾遺には今昔を面白いところのみ書きやはらげたもの。これは絵が本体で現に残つてゐる。して見ると今昔と宇治との緊密さより見て、今昔にも絵があつたと思ふ。話が断片的故に、絵の入りやすい理由がある。

逸話集で大切なことは二つある。一つは歌物語との関係、一つは日本の小説の発達に逸話集が交渉してゐる点。

平安の物語は物語絵として発達し、平安末ほどひどい。物語絵が逸話集を模倣しただけではない。日本の昔は仏教の方便として絵解きをしてゐる。江戸時代にも熊野比丘尼がやつてゐた。その絵解きの方法が江戸前では巻物を路に拡げて絵と文句と交互にあり、文句を読みつゝ、絵を示してゐる。平安朝はどうかかわらんが、絵解きの古い形は鎌倉まで上れる。平安朝には絵だけのものは沢山ある。この時に絵解きの詞があつたと思ふが、それはわからん。

鎌倉より絵解きの起こる理由を考へねばならぬ。仏教の逸話集の形と平行して物語絵の絵巻が扱はれた。物語絵と絵詞を比べると、どちらかゝ影響あり。私は逸話集の影響だと思ふ。

上欄に絵を下に経文を、今度は全体に絵を色紙に経を入れた。その形をうつして物語絵を作つた。それに歩み寄る路は知れる。逸話集にもつと碎けたものがある。だから物語と近づいて行ける。私は物語絵は逸話集よ

り影響を受けてゐると思ふ。

日本の小説は物語絵の助けで發達す。物語絵、これが、平安朝になると變化して、平安末になると一家一門の歴史を書いた絵物語が出て来る。——正確に平安朝のものとはいへぬが、保元・平治物語等あり。戦争のことを書いたもので、世の中のはかない事を具体的に感ぜさせる方法として説話の絵巻を利用する方法が行はれた。平安中期のものにもかゝる意味があるかも知れぬ。世の中に欠陥を感じねば宗教に入らせられない。感じてはじめて宗教心が起る。平安末にはなにかしら宗教に入らせやうとしてゐる。円満な恋愛を書いてもその欠陥を感じさせるやうにしてゐる。平安朝末に起つて来た軍記と同じ方法を平安にすでに恋物語で行ふてゐたと見てよいと思ふ。絵巻物が物語に入る本当の経路は女が漢文経巻を写し、説話集を写した為である。字だけ写すだけでなくて、絵も写す。厳島神社の扇面写経といふのである。これは絵巻物、形を二つ一緒に行つてゐるものである。女が字のみを手習ふのでなくして、経、逸話と共に絵を習つた。そこに混乱が起つて来て、物語に絵が入る事情が備はつて来る。

かくして物語といふものは平安朝女房日記以前にあつて、日記に書き込まれて日記が飛躍して、三通りの意味を含む。その中歴史と逸話集とを話して、この次は歌物語と日記との關係を。

第一日正午前

第二章 散文学の分化

一、文学意識の生じた時代

平安朝の物語の概念を云ひたい。極く簡単に云ふ。藤岡氏の平安朝篇、日記に関しては池田亀鑑氏の宮廷女流日記の研究。

こゝでは物語の話をすればよい。

偶然物語の時代と物語の形とが一致してゐるので、短いものより長篇へ行つて行くやうに見えるが、事實はさう整然とは行かない。短篇、平安初期の特徴としては短篇が栄えたらしい。それに接して中篇が、最後になつて長篇か。今偶然さうした材料が残つてゐるといふことで、あまり単純に見えるのは不自然である。

物語の話は勢ひ、奈良朝より云はねばならぬ。奈良以前より文学意識をもつて書かれた文学が起つてゐる。

従来あつた地方地方の語部の物語を文章に引き直した。地の文を漢文で、歌のは万葉仮名、それから又変化して従来伝つてゐた物語を自分の主観を通して作り直したものだ。多くは長歌の形をとつて行はれる。万葉の浦島の子の歌。竹取翁の歌の類は昔からあつたものを自分を通して作り直してゐる。だから長歌の反歌としてついてゐる短歌もみなもとの物語にあつた歌でない。奈良、又は奈良以前に文学意識をもつて従来を文学を書き取つたものはこの二つ。この二つながら奈良以前の学者、主として漢文学者の作つたもの。日本の奈良、奈良以前の日本の文学、日本の詞でもつて作つた文章中、までが、漢文学者の手によつて作られてゐる。漢文、宣命、短歌と両刀遣いをやつてゐた。万葉にさういふ物語を翻訳した長歌を残してゐるのはすべて漢学者、又は漢学の素養のある人であることがわかる。まして万葉以外の浦島子伝、続浦島子伝、柘枝伝——吉野の仙女が——これは残つてゐない。その他、現実の人間の事に空想を加へた上宮伝——聖徳太子の事を上宮法皇といふ。法皇といふことは一種特別なこと。上宮法皇帝説等もある。半分、空想の入つてゐる

もの又は全然昔の物語を漢文で書いたもの。これ等はいはゞ中篇である。これは藤原の都までも廻れると思ふ。ある人のある時期の物語を書いてゐる故に時間はかなり長くなる。性質より云ふと中篇、大抵恋物語。その系統から更に眞実の人の伝記を書く。歴史と伝説、物語の区別のない時代。

その後、著しく頭をあげたのは、短歌中心のもの。物語が勢力を失ひ、物語の中の歌が重んぜらる。藤原より奈良に持ちこし、そして平安にまで行く。藤原の都が短歌の興隆時代。それ以前は短歌より長い歌があつた。

短歌の勢力を得た時代を考へると短歌中心の時代がわかる。

中篇が行はれると同時に短歌中心の文が行はれ、地の文は口の上で話した。それがその説話の部分で文章に借りて来る。私は、短歌のものがあらはれるのは中篇、それが歌中心の物が出る。はじめは長歌が中心であつて、後に短歌となる。記紀の中に長歌中心の物語がある。その中には歌があつて口で地の文を説明してゐたものがあつたに違ひない。それが中篇の勢時、その

下を通つて行はれ、やがて記録される。これも奈良にすでにあること。これは国振りの歌を唱へると、国の魂が唱へられた人につく。歌にその土地の大切な魂が込つてゐると考へ、どうしてか歌を書き留めた。故にずっと後世まで歌を大切にし、歌が生命をにぎつてゐると考へてゐる。そのもとは前述の信仰。

この歌物語は平安朝から云ふと一つは短歌中心、一つは諺を中心としたものといふ事實がある。諺は神の言葉を唱へると全体の祝詞を唱へると同じ効果を持つ。命令訓戒的のもの。何かありさうだけれども意味がわからん。仁徳と若郎子との位譲りの時、宇治、難波の路を海人が持ち歩いて、野島の海人、

海人なれやおのがものからねなく

なれやは、なればや、であらうか。ならめや、であらうか。ない、と二用の用法あり。

あまなれやは一種の修飾になつてゐる。この諺は位譲りの時の諺といふが、何の關係のないこと。何かによつてゐる故にさういふ風に連想するのである。垂仁帝の佐保姫の后が稲の砦の中に入つて焼死なうとした時

の話。

ところ得ぬたまつくり

といふ諺が出てゐる。玉造りは洒落で、職人は土地がないといふ事をいふてゐるのか、職人は土地に当時根柢を持たず、その洒落で、俺は自分の思ふやうにならぬといふことを云ふたのだと思ふ。

現在あることは神聖故に、昔の故事があると思ふてゐる間に故事と結びつく。諺の説明を口頭でする。だから諺の意と異なることもある。歌もしかり。物語より取り出した歌の物語が忘れられて後にある場合の歌であらうと連想される。母体より歌諺が遊離してゐると歌諺を中心として説話が出来る。短く事情を書いてゐる。かゝるものが、次第に發達する。記紀にまで上れる。

平安に入ると、少し事情が違ふ。歌物語である。竹取、伊勢、大和物語等いふものがある。これ皆平安百年過ぎて、すぐ出来て来たものである。その中、これまでの伝説では伊勢が一番古い。初め百年の中にくひ行つてゐる。それから伊勢の系統の大和物語。これは再び起こらうとしてゐる。中篇の形に近い。一方に竹取あり。源順作といふ伝説あれど、疑はしい。平安前期の

源順、後期の大江山房と皆結びつけて行く故に信ぜられない。たゞ、源順といふのは作者を代表させただけである。

この三つを中心として歌物語の話をしたい。

イ、短篇(歌物語)――前期

これの起つた時は次の時代の過渡の姿を持つて来てゐる。と同時に少し早く、逸話集がある。宗教的歌物語といふものがある。こゝにはじめて、靈異記に歌が入る理由がわかる。歌が入ると物語が神聖と思ふ。

竹取は私は新しいと思ふ。あまり歴史上の事実に近すぎ。伝説化さすに事実を事実として扱ひ過ぎる。竹取の人物は皆奈良の實在の人である。諸平の竹取物語考、も少し時代が遅れてゐると思ふ。たゞ困ることは

伝説的に時代がついてゐるので、時代を下げにくい、源順よりもつと下つた時代。源順は平安百五十六年より後の人。それより遅れる。

竹取は諺の起原を説く形をとつてゐる。その中に歌物語の形式を取り入れてゐる。段落段落がすべて諺で説かれてゐる。五人が競争する時分に皆落ちがついて

ゐる。

おもなきことをはちをすつといふなり

とある。落し咄のやうだが、諺の解説である。日本の落し咄の出発点はこゝにある。

かひなしといふ

等、皆落ちがついてゐる。つまり諺の解説、それが歌物語と一緒になつてゐる。これは新しい形、それより見ると伊勢の方が古い。たゞ竹取は種が古い。竹取が神聖な乙女と出会つた話は、沢山ある。今残つてゐる竹取は大部新しい。

伊勢、大和を通じて見られる事實は、伊勢の国風の物語、大和の国風の物語といふことが、その名前のもとと思ふ。

いはしの近江県の物語せん

等万葉に見えてゐる。どこそこの国の歌物語といふものがあつた。つまりある国に沢山ある歌が本義を忘れ、たゞ大切である、どういふ時代にこの歌は作つたといふ云はれつきで残つてゐる。伊勢、大和は伊勢、大和の国風の物語といふこと。日本の物語ははじめの形が残らず、平安中に書き易へて行き、書き足して行く。

作者と同格の人が書く故に原作者の權威は今考へるやうなものではない。

日本の物語にはもとの形のまゝのものなし。竹取、伊勢等も皆かくして書きかへられたものであると思ふ。少なくとも書き足したものに違ひない。伊勢、大和を原本のまゝのものと考へてはいけない。伊勢に拾遺集の歌が入つてゐるからとて、拾遺集以後のものと全体を定めることは出来ぬ。定家あたりの書き入れがある故にどん／＼変化して行つてゐる。その中、どこが原本の文章かといふことは云へないが、今のところは名高い、文章が原本だ位の粗雑なことで安心するほかない。大和等ことに著しい。在原滋春作と花山法皇と二人の作者があげられてゐる。天子としては愚かな天子らしいが、文学には何か意味がある。拾遺集も花山院に關係がある。何か花山院に關係が平安朝の文学に特別な關係のあつたことを示す。

で、大和は出来たのは伊勢より新しく文学的の価値も劣るが、材の扱ひ方は伊勢より古い。伊勢は文学意識が充分動いてゐる。伊勢には理想があるが、大和にはそれが無い。大和は出来たのは新しいが態度としては

古い。大和に実在の人の事を書いたところがある。私には伝説的のことを書いたものゝ方が古いと思ふ。大和に關した物語歌がある故に大和といふと云はれてゐるが、あまりに少ない。もとはさうであつたのが、次第に変化してあんなものになつたと思はる。短篇は以上三者が中心で、諺歌を中心としてゐる。現在のは歌物語を中心としたもので、変化したもの、これを通して古い形も知れる。

口、中篇(恋物語)——中期

中篇の物語は古くからある。大抵恋中心である。でないこともある。ある人のある期間の生活を書くといふこと。古人の理想的の生活は男女關係を如何に処理したかによる。平安になるとこの考へが更に強くなる。偉い人は沢山の女を持つてゐてそれをうまく捌き、女等に妬まれてゐる人でなければならぬ。平安朝になると色好みといふ理想が出てくる。第二義のいやしい性慾的のものはすきものといふ。いろごのみの理想的のものは源氏。ある人のある期間の生活を書く、神秘的な事件をか、ねばそれが次第に色好みの生活を書く。

ところが、平安のものは不思議に原書が残つてゐない。書き直し、只翻訳したものである。現在のものは名のみ残つてゐて、原文が残つてゐないものらしい。源氏以外に中篇だと思はれる名前ものがうんとある。大抵人を中心としてゐる。交野少将、大津皇子正三位（從）、桂中納言物語、芹川の大將、藐姑射刀自、等を見ると大体人を中心としてゐる。その他の人のある場合を書いた。殿うつり、道心す、むる松枝、かばねもとむる宮等いふものもある。かはほり、かくれみの、こまの等名は伝へてゐて殆んど本はない。その中、中篇の中で幾分長めのもの、中伝つた名前と同じ名のものが残つてゐる。住吉、とりかへばや、堤中納言、落窪、これ等のものは本が残つてゐる。私は平安のものである事は信じない。住吉は源氏中にある。住吉の粗筋と合ふが、文章は室町に下る。これは書き直しである為にさうした変化が起つて来るのである。住吉は本当の偽物ではないが、非常に改竄せられたもの。とりかへばやも文法上、話の組織等より見ると平安のものでない。伝説の特色に入らない。平安にはとりかへばやの伝説は入らない。擬古文である。うっかりすると

間違へるが、文法上のごまかせない。平安の中篇——長篇に近いもの。落窪物語は継母子の物語で室町に近づいてゐる。これも文法的にくらも指摘出来る。表面は擬古文で、平安朝らしくしてゐるが、文法が違ふ。隠者は平安のものを讀んでゐた故に、よく書けた。筋は源氏中の落窪と似てゐるが、これも改作である。

堤中納言物語——藤原兼輔の作だといふ——がこれは隠者の栄へた時分に隠者が書いたもの。三河の狩谷より出たい、本を久松氏が出してわかるやうになつたが、それでもわからんところがある。堤中納言は氣がきいてゐて弄ばれてゐるが、コント等にびつたりはまる短篇が集まつてゐる。その趣味の洗練のせられ方は鎌倉の俳諧の趣味である。俳諧的に洗練せられたもの。私は例へば兼好などの居つた時代に人が作つたものだと考へてゐる。

かくして大抵書き直しな偽物である。名のみ残つて現物がなないことになる。平安の物語は非常に寂しいものになる。

八、長篇(家物語)——後期

長篇物語は平安の末になつてからのもの。長篇物語は、一つは世人がある時期の事を書くのみで、物足らないで一生を或は世継の形をうつしてその人の親の時代、子の時代、家庭の様子を書く。即ち中篇と歴史物語との合体である。こゝで云ふべきは源氏物語と宇津保物語の話である。もう一面、長篇の出来るべき理由は、中篇を書き直してゐる中に次第に育つて書き足す部分が増し、他の小説と結びつく事がある。宇津保等は巻の順序すら今だに決定しない。それは宇津保の本体の他に關係のないのが、入り込んでそれに関係づけたのである。

だから所直しも勿論書き足しが増して来た。又合理的に一緒にせられて来る。さうすると大きなものになる。藤岡博士は日本の歴史は西洋の文学歴史と同じ経路を経てゐる。中世ローマ帝国に欧州の諸国がついて、ローマ方言で書いた小説がロマンスといふ。ナイトの物語が入つてゐる。支那の伝説小説の時代それからのべるの時代が来る。支那では人情小説の時代は来なかつた。日本のものを見ると、藤岡氏は竹取、宇津保、源氏と

伝説的に並べた。

宇津保の俊蔭の巻は、源氏に出てゐる筋と同じ筋と見ていゝ。すると竹取、宇津保、源氏とならべることが出来る。

竹取——(筋) 一種の神秘的な小説。宇津保の俊蔭の巻は波斯国に流されて行く話より十二弦の琴を求める話、——(筋) 俊蔭の巻を離れると、写実小説、人情小説にうつる階級である。

それから源氏へ行くといふのは、うまい考へ方であるが、宇津保の人物は鎌倉時代に実在の人物の名である。平安に□惑することは出来ぬ。鎌倉の所作と新作との間の合理化があること、思はねばならぬ。これは鎌倉のものであると思ふ。それを今だに平安のものと信じてゐる人がゐる。

宇津保で變つてゐるところは絵詞と物語本文と一緒になつてゐる。絵のところへ来るとごく簡単な絵詞にしてゐる。非常にうまいもの。

源氏物語について疑へば、日本の小説はなくなる。はじめから源氏はあんな大きなものでなく、作者も女のみでない。紫式部が一部を作つたのであらうが全部を

作つたのではない。平安の女と今の女とは違ふ。文筆に携はり、どんなことでも出来る位置にゐた。源氏はさう簡単に今のまゝが古いものと形と信ずることは出来ぬ。源氏には縦横の並びがある。年代を負うてまっすぐに書くところが縦、年代を中断して書くところが横の並び。

つまり普通の小説ならば縦の並びに行くのに源氏で見ると、さうではない。源氏が帚木の巻で後半空蟬といふ女に逢ふところがある。低い人物には名があるが、源氏では高い身分の人は名がない。学者が符をつけてあるだけ。空蟬は源氏が伊予の介の長男紀伊守の家へやつて来る。方違へとて、源氏がこの夜空蟬の所へ入つて行つて無理なことをする。その後は空蟬はいつも避ける。その空蟬からつゞけて空蟬の巻が出る。更にそれだけでなくして、源氏が須磨へ流される。平安の時代の物語では身分の高い人のことをかれこれ云へなかつた。

その後に朱雀院が病んだのは罪のない源氏を流した故と帝は考へられて源氏を戻す。石山に源氏が参る。空蟬が石山へ源氏が参る日に常陸より戻つて来る。逢坂

の関屋で行き違ふ。そこで源氏が歌を送る。それを関屋といふ巻。紀伊守が空蟬を我が物にしやうとして空蟬尼となる。

源氏が後にもつと栄へると空蟬がまた出て来る。六条院へ女を皆迎へる。平安の理想であつたのである。そして二度ほど出て来る。室町時代頃の注釈者は空蟬が六条院へ迎へられたのを残念がつてゐる。

関屋は帚木の巻の並びである。それでいゝのにまだ後にちよいちよい書く。胡蝶の巻、若菜等に出て来る。それは書き継ぎによつて結果をつけんとした故である。空蟬の出て来ることが源氏で疑問がある。作者自身がはじめから出すつもりであつたかどうか。花散里の巻——源氏では対象的に書いてゐる。日本の小説戯曲に通じた癖——花散里をとふ前にわけのわからん女を中川の宿りにてとふてゐる。京の町の中央北の所。空蟬の居つた紀伊の守の別荘も中川。花散里の中川のくだりがもとでその半分で帚木の巻を書いた。そして今度は関屋が出来たものだと思ふ。

二、個性文学の時代

イ、紫式部……物語作家の代表者

今日は第二章第二項のイと関連させながら源氏の話を
する。

源氏に縦横の並びを学者が云ひ、事実もあり、その中、
横の並びは源氏のある部分の話から枝を咲かせたもの
だといふことがわかる。話の結着をつける為に、書き
継ぎ、書き足りないからとて書き足し、又文飾を加へ
る点もある。

現存源氏に異本多く、非常な分量と思ふ。帝大で池田
氏もはじめてゐる。大仕事で、その仕事はかつて地震
時から後に校本万葉集が作られてゐる。その仕事も非
常に意味がある。が、万葉集は如何にせん、信用でき
るものは平安の末以後第一の材料はない。

源氏は源氏が出てから近い期間に源氏が研究せられ、
近い時代の異本も残つてゐるので、校本万葉よりも意
味がある仕事が出来ると思ふ。いゝ学者である。

源氏には大体二通りあり。湖月抄が代表してゐる青表
紙本系統、藤原定家の本の流れである。それに対して
河内本といふものがある。河内守源親光の系統の書

物。この系統の本だから河内本といふ。この二つが並
び行はれてゐる。近世は前者専ら行はれ、後者は珍本。
定本源氏物語、金子氏は書物をよく読む点ですぐれて
ゐる。今の学者は珍しい本ばかり探して書物は読めな
い。地方にゐる人はことに普通の本をよく読まねばな
らぬ。流布本をよく読んで鍛へ上げねばならぬ。金子
氏は読めればよいといふ気持から湖月抄でわからん点を
河内本にて補つた。

だけでも河内本のどこにあるとも書いてない。その点
残念である。諸君が読むのには金子氏のは上巻がよい。
中巻はよくない。ともかく上巻は参考に持つたほうが
よい。湖月抄はいゝが、昔の本を読むには注釈が短い
から湖月抄を読むのには金子氏の本を読むとよい。よ
く書いてある。その中に三矢氏の文法的のいゝところ
も説いてゐる。その点でも信用できる。

河内本の方がいゝといふ人もある。私はこれは青表紙
系よりもいくらかまはりくどい。源氏のわからんところ
をわかりやすく書いてゐるやうに思はれる。それだ
けまはりくどい。ある点は青表紙本に対して一種の注
釈の形をなす点あり。二つが流れて来て栄古があつた

のか、定家が榮へて定家流の青表紙本が榮へたのである。

こゝで形づけたいののは、日本の書物を対象とする学は多いが、源氏を目的とした学問が一番幸福。万葉集にして見ても万葉集が出来てから百三十四年後はじめて村上帝の時に研究せられた。普通の万葉の解釈では二百年近い年月が経て研究せられたことになる。この間に読んでもわからない部分が出て来た。明治の初めに近松、西鶴を研究したのと同じ位の時代の開きがある。故にわからんところがある。源氏は源氏が書かれてゐるあとから研究された。源氏が研究された明らかなの事実は藤原俊成がまづ初めて歌を作る素養として源氏を研究せねばならぬと称へた。それ前にそれを言ひ、実行した人があるに違ひない。それで私等の考へでは、まだ俊成が生れるか、生れて後もまだ源氏の一部分が書かれてゐたかもしれない。推定だが書いてゐた人がないとも限らん。ないとしても紫式部を去ることそんなに遠くない。

俊成が歌を作るのには源氏を取り込んで源氏をよく読まねばだめだ。今までは伊勢、等を読み、わからん乍ら、

万葉の形骸どころか詞のみを学んでゐた。書物にあらはれてゐるところでは俊成にはじめて源氏を読まねばと云つた。その効果として俊成の仲間の歌が變化した。千載集、俊成の息の掛かつた人の歌集が新古今。この人々の歌が一種小説的の生活でも経験でもない空想を作るやうになつた。それは源氏等、ことに源氏の影響であつた。こゝへ行く路を俊成は見出した。俊成に出て、河内親行、定家、親行へ俊成の書が行き、それに校合したのが、河内本。その後定家の校合したのは定家本。俊成がなかつたらば源氏の書は残らん。もう俊成前より源氏は多少、読まれ、研究せられて、わからんところを解いた故に、源氏はわかるのである。卒然として源氏が出たらばわからない。

我々にすると痛切に感ずる。注釈にあるのが胸にぴんとくる。けれども我等の時代が不用意に読めばわからんところがある。それがわかるのはこれは源氏の学統に頭をさげねばならぬ。かういふ幸福は日本の書で多くはない。源氏は注釈を読めばよくわかる。万葉集は契沖の出るまでは殆んどんでもない解釈である。とても源氏と万葉集の学問の研究には雲泥の差あり。だ

から源氏を読むには注釈書を読む必要がある。湖月抄の上のよく読むと平安のものを読みこなす力がつく。ともかく大変重んぜられて来たことは事実である。

この二つの系統の書物が次第に進む間に二書が一方を重んじて来たが、これをして来たのは連歌師俳諧師。その系統をたゝなかつた。万葉集はその人等におへなかつた。契沖等が出て連歌師の系統を受けぬ新しい系統の人が研究した。源氏では連歌師の系統の学者を否定出来ぬ。

源氏では湖月抄を苦勞するのが本当である。湖月抄の外にも少しいゝかと思ふのは、岷江入楚といふ書物が出て(日文注釈)だけどこの二つを照らし合はせてやればよい。湖月抄は大抵この引き写し。書物の歴史のみ云つても大変な部があるが切り上げる。

源氏が書いて後、平安末頃より作者に対して二つの批評が行はれた。式部が仏典を賛美する為に、仏の、□語の戒を犯してはいけぬことになつてゐる。源氏は犯してゐる故に文学はいけぬ事になつてゐる。これに対して逃げ口上として、讃仏乗(仏典をとときやはらげる)といふことを云ふてゐる。式部は讃仏乗の理想

より源氏を書く。又、紫式部はあゝいふ空言を書いた為に地獄に苦しむといふことが行はれてゐた。紫式部のあの世の苦患を救ふ為に度々源氏供養を行つた。謡曲以外にも沢山これを扱つた小説あり。石山寺で行はれたらしい。どうも私は石山で源氏供養が行はれた為に、石山で書いたといふ話が出たのではないかと思ふ。それはなぜ石山で源氏供養が行はれたかは不明。さういふ二通の信仰を持つ。今は源氏その人から源氏は仏教の、人をして菩提心を起こさせる為に書いた説がある。後にはものゝあはれを示す為に書いたのだともいふ。宣長がこの結着をした。宣長は日本の文学論に時期を画した。そこは宣長の仏を嫌つた為。

源氏を見ると、私等の考へてゐる説教と違ふ。平安式の仏の説教が見えてゐる。円満に充ちた空気より菩提心を起こさせるやうに書いてある。露骨に仏の理想とするのは当時悪かつた。物語ではよくなかつた。近代の小説で哲学的の概念の出るのがよくないのと同じ。議論や概念が消化ないため、何となくその気持ちにいなふ事が大切であつた。源氏が円満な生活をしながらひよつと空虚を感じしめる。それを読者が読んでさ

びしく思ふ。作者が露骨に仏教感を出さぬからとて仏教的でないとはいへぬ。又部分的に仏教的のところが見える。私は源氏と仏教とは今までの考へと変へて考へねばならぬ。源氏は仏教を広める為でなく、低い階級の文学の影響、宗教的の低い階級の文学が、神と仏と交代して来る。その影響が高尚な文学に及ぶ。高尚な文学は古い文学の書き直し故に宗教的な味を立派な文学が持つて来ねばならぬ。私はその点から仏教を源氏に持つて来る。

源氏は一人の作者でなく、平安末につれて男の作者がまし、男が女の兒をして書く習慣がいつまでも続き、隠者が女房にとつて代はる時代になつても隠者は女房が書いてゐるやうな兒で書いてゐる。隠者は半僧半俗故に宗教味がどうしても入る。どうしてもその人々の手に入つたものは宗教的になる。たゞ物語式に書く故に露骨に出ない。それは若菜上下二つとも源氏のどの巻より大きい。この二つは仏教の色彩が殊に濃厚である。若菜以外にも仏教の色彩の多い。私はある仏教の色彩の出でゐる結極もの、あはれを知らせるところに落ち着くか。単に趣味、心が結びつくところのみで

なく、宗教的に結びつく。人生の欠陥をいやすのはこれが普遍的の道理だと感じて慰められる。芝居を見て涙くのも、普遍的のことだと安心する。その普遍を知つた時に宗教的な明りが見えて来る。昔の人はそんなやかましい議論もないし、考へてゐないがそこに落ち込んでゐる。従来の色好みの生活を押しすゝめ一変化して来たところ□□に欠けるところを讀者が見て穴が出来る。そこが狙ひどころだと思ふ。

源氏は書き方が定つてゐる。源氏物語の一番最初は桐壺の巻といふ。更衣の死を帝が悲しまれる。壺前栽に向つて、この抒情的な気持ちをくどくど書いてゐる。昔の人はそれが好きであつた。今だつて好きな人があらう。桐壺の巻を壺前栽の巻ともいふ。

この形が単に桐壺だけでなく、源氏の終りにもある。源氏物語は源氏が人臣の位を極めて紫の上を失つて、幻の巻が出て来る。そこは庭に源氏が対して四季の景色の移り変りと源氏の悲しみをからみつけて書いてゐる。それからあとは源氏の子供の時代になる。それからあとは源氏の次男の薫の事を書いてゐる。一番最後

に十帖を宇治といふ所に薫が交ふところが書いてある。その以前、幻までは薫のことだと思ふ。

その以前に雲隠れの巻といふのがある。考へて見ると何もない。巻もない筈である。源氏の死んだところは何にもない。この巻に対して議論がある。古人は何にもなく神秘感を与へるのだといふてゐるが、信ぜられない。そこに小説があつて失はれたとも考へられる。私はそこへ書くつもりで、書かずに了つたものだと思ふ。源氏だけである。かゝることのあるのは。

ともかくも桐壺の帝のことを壺前裁で、源氏の悲しみ又八の宮が悲しんでゐる。それが昔の人の物語を書く定形であつた。浄瑠璃でさばりがないと物足らぬといふやうなもの。源氏はどこから書いたかわからない。壺前裁ははじめあつたのか、あとからついたのか、不明。それは帚木を見るとこの書き出し方が源氏一代の総論を書いてゐる。

あまり辛抱して堪へきれなくなつて、後の世に変な評を残した。それから品定めを書いてゐる。それから源氏全体の話が始まる。この点から見ると、帚木があつ

て、桐壺を書いたと見える。

更に源氏を見ると、紫日記を見ると源氏は若紫の巻より書いたらしい。それは公任が紫式部は上東門院といふ方についてゐた。上東門院に公任が来て、

さへもんのかみあなかしこく 源氏

源氏といふとまづ若紫の巻を思ひ出し、まづその主人公を思ひ出すらしい。今では光の一代記が主と見えるが、実は紫の上と源氏の二人の物語が合体したやうに見える。さう見るのが本当らしい。私はこの文章をたゞ公任が云ふたのだと思はぬ。若紫の巻が一番印象深く、この辺が源氏の古本の発端ではないかと思ふ。紫式部の居る頃より源氏はやかましかつたと思ふ。昔の人も紫式部が一度に書いたとは云はぬ。

物語はまるくそらごとをつくらんで、昔のことを書いたんだと思はせねばならぬが、誰とわからせることはいけない。故にモデルをいろく継ぎ合はせる故に自然わからん。

道長の生活が入つてゐるに違ひない。平塚のぼる氏は伊周を源氏の若い時に入つてゐるといふ。私は中心は道長と見てゐる。後年を道長、計画的にモデルにする

のでなしに、重つて来る。読者は事実だと思ふのでいろ／＼人を疑ふのである。

有名な「うちの上の源氏物語、人に読ませつゝきこしめしけるにこの人は日本紀こそ読みたまへけれ、まことに才あること……」、日本紀は国史といふ事。朝廷で選んだものでなくても、又は正式に選んだ歴史といふこと。固有名詞ならず。それを想像つけて考へて漢学が出来ると殿上人がいふて、日本紀の局と云はれた。ともかくも平安朝が始まつてからの事実をよく知つてゐる人だと思はれた。湖月抄、岷江入楚等これは誰のことだと定めてゐる。書くつもりでなくても知つてゐる事実が集まつて事実が書かれて来たのである。道長のことを書かうとしてモデルが色々出たのである。栄花物語、道長のことを作り物語風に書いたのである。源氏とは皇族より臣下になつた人の物語といふことになる。道長のことが事実をかへる為に源氏とした。作り物語としての道長が源氏に出て来ると思ふ。書いてゐる中に次第次第に枝が出た。複雑になり大きくなつて来た。式部がはじめ書いて、後に次第に書き加へた。女のみでなく男が書く。男でないと書けない

ところがある。源氏の様子を二通りに書いてゐる。一ヶ処は自分が女になつてあんな男に逢ひたいといふ感、又一つに美しくてたまらんよい女にして自分が男で逢ひたい。

これはどちらも男の筆である。両者男の考へである。源氏の一番さきの妻、葵の上(本名にあらず)お腹の大きくなつて寝てゐる様子を見て、死なせられないやうに書いてゐる。女の人が書くかしら。やはり男である。さういふところが沢山出て来る。筆にも女らしい筆とかたい男の筆がある。源氏にはかき入れの部分と変る部分とが細かく書いてあつてわからんが、詳密に研究すればわかると思ふ。

源氏は紫式部一人でなく、男も書き、沢山の人が書いてゐる。男は見当がつく。平安に起つて鎌倉の作者階級の中心となる隠者階級の種類の人が多く男では手を入れてゐるのではないか。

光と紫の上の物語の交錯。源氏の元の形があつたのではないかと思ふ。